**ラテンアメリカ・カリブ研究**　第 6 号: 36–42 頁 ©1999

〔論文〕

# 民族としてのクレオール
## —スリナム社会の事例から—

**岩田晋典** (Shinsuke Iwata)*

## はじめに

南米大陸の北東、大西洋岸に位置するスリナム共和国は、1975 年にオランダ王国から独立した。その歴史の大半はオランダの植民地としてプランテーション産業を軸に展開して来たものであり、今日のスリナム社会のほとんどは、労働力の必要性に応じて世界各地から移り住んだ人々の子孫から構成されている。

首都パラマリボならびにその周囲に位置するワニカ郡の住民を対象にして、1997 年に同国統計局が行なった世帯調査では、次のような「エスニック集団 etnische groep」の構成が描き出されている (Afdeling Huishoudonderzoeken 1998)。なおここでは、世帯調査で用いられたオランダ語ならびに英語の範疇名の前に、日本語で一般的と思われる名称を加えてある。

クレオール ..... 80,471 人 (31.0 %)
　Creool/Creole(Negro)
インド系住民 ..... 82,271 人 (31.7 %)
　Hindostaan/Hindustani
ジャワ系住民 ..... 43,834 人 (16.9 %)
　Javaan/Javanese
アメリカ先住民 ..... 6,003 人　(2.3 %)
　Indiaan/Amer-Indian
中国系住民 ..... 6,261 人　(2.4 %)
　Chinees/Chinese
マルーン ..... 1,314 人　(0.5 %)
　Boslandcreool/Bushnegro
コーカシア系住民 ..... 16,542 人　(6.4 %)
　Kaukasisch/Caucasian[1)]
その他 ..... 3,437 人　(1.3 %)
　Overige/Others[2)]
「混血」 ..... 14,432 人　(5.6 %)
　Gemengd/Mixed
不明 ..... 5,196 人　(2.0 %)
　Onbekend/Unknown

スリナム社会にもその他のカリブ海地域と同様、「クレオール」と呼ばれるアフリカ系の人々が存在している。クレオールと聞いてまず思い出されるのは、言語学におけるクレオール概念であり、あるいはそれから派生した複合文化の総称としてのクレオール概念であろう。均質的・同質的・固定的、本質主義的、さらに実体論的な文化観に対して昨今活発になされる批判の中で、それに対抗するものとしてこうしたクレオール概念は取り上げられている。たしかに先のような文化観は、ナショナリズム・コロニアリズム・レイシズムと連動しているだけではなく、複綜的な社会・文化現象を理解・説明する上で説得力に乏しいという点でも批判されてしかるべきであろう。

けれども、「クレオール」という人々が当該社会で具体的にどのような人々を指すのか、あるいはそれはどのような範疇であるのかというような具体的な議論は充分になされていないように思われる。たしかに、スリナム社会の「クレオール」の「文化」にもタキタキ語 *Takitaki* というクレオール言語が含まれるし[3)]、「クレオール」が「混血の人々」と捉えられることも多い。しかし、実際には世帯調査の分類にも表われているように、当社会の「クレオール」は「混血」を意味するのではない。むしろ、「クレオール」は「混血」を生む民族のうちの一つとして捉え

* 立教大学大学院

1) この範疇のかつての名は「ヨーロッパ人」であった。
2) ここにはユダヤ系およびレバノン系住民が含まれる。
3) 以下の文中、イタリック体で表記されたローマ字は全てタキタキ語である。

られており、両者は弁別されているのである。

本論では、前述のような文化批判あるいは新しいイデオロギーのマニフェストとは一線を画し、「混血」との比較を通じて今日のスリナム社会における「クレオール」という範疇の意味を探ることを目的としている。なお、当社会には「民族 volk」、「人種 ras」、「人口集団 bevolkingsgroep」など、「エスニック集団」に相当する抽象名称がいくつかあるが、本論では議論を円滑に進めるためにその互換的な意味を利用し、それらを一括して民族と呼ぶことにしたい。

## 1. 同質的ではない人々

スリナム社会は、必ずといってもいいほど「多様な」、「多エスニック的」、「多文化的」、「多元的」、「文化的モザイク」、あるいは「多人種的」として形容される。複数の単位から構成される一つの社会という考え方は、スリナム共和国の国歌や国章にも表われている。この場合クレオールという範疇は独立せず、マルーンとともに「アフリカ大陸から来た人々」として一括される。けれども、スリナム社会で日常的に用いられる分類や、さまざまな文献、マスメディアから判断すれば、この括り方よりも、両者を弁別し世帯調査の分類のように独立した範疇とみなす方が一般的であることがわかる。

よく言われるように「クレオール」という語は、「生まれる」、「育てる」、あるいは「飼育する」というイベリア方言から派生したものである。また、いくつかのカリブ海地域と同様に、スリナム社会においてもクレオールは植民地で生まれ育ったアフリカ系住民を指示し、アフリカから海を渡ってスリナムに直接連れて来られた奴隷 (「塩水ニグロ zoutwaterneger」と呼ばれた) とは区別されてきた (Caprino 1995:62)。しかし、1863 年に奴隷制が廃止されてから 140 年近く経った今日、こうした分類はもはや用いられていない。現在クレオールに与えられる意味は、「混血の人々」の他に、「プランテーション奴隷の子孫」や「西洋的あるいは都市的生活様式を身につけたアフリカ系住民」というものである。

世帯調査においてクレオールの範疇の英語名 Creole にも Negro が括弧付きで加えられているように、クレオールと呼ばれる人々とネハー Neger(英語の Negro に相当する) と呼ばれる人々が一致することはたしかに多い。後者は、黒い肌などのアフリカ的な身体的特徴を相対的に多く持つ人々を指示する名称である[4)]。クレオールの中には、身体的特徴の点でマルーン (プランテーションから植民地内陸部に逃亡し、そこで共同体を築いたアフリカ人奴隷の子孫) と呼ばれる人々と区別が困難な人々も少なからず含まれている[5)]。けれども、ファン・リエア (Lier 1971:2) やブラナ＝シュート (Brana-Shute 1979:XIII-XV) がいうように、クレオールはネハーだけでなく、いわゆる「カラード」も含む幅広い範疇である。これは、植民地スリナムにおいて「白人」の性別の割合がきわめて不均衡であったことや未婚を要請する職が多かったことによって、「白人」とアフリカ系奴隷あるいは自由人との内縁関係が広く行われたからである。また、アフリカ系住民と非「白人」の民族との間にも同じような関係が少なからず存在してきた。スホッフェルメアは出所を明記していないものの、1950 年の国勢調査におけるクレオール人口の少数のみが「純粋なアフリカ出自」であったと語っている (Schoffelmeer 1982:9)。たしかにクレオールとマルーンの間には、たとえそれが傾向に過ぎないとしても、身体的な違いが認められる。たとえば、両者を比べた場合、前者には色白で体の大きい人が、その一方で後者には色黒で体の小さい人が多い。また後者について「臭い」、「頭の形がおかしい」、「乳房が

[4)] 肌の色が白ければ白いほど良いという考え方はスリナム社会でも頻繁に見い出される価値観であるが、自らに対しても他者に対しても、何のこだわりもなくネハーということばが使われることは決して珍しくない。

[5)] マルーン (オランダ語で Marron) は、世帯調査で用いられたように、ボスランドクレオール Boslandcreool やボスネハー Bosneger(英語で Bushnegro) と呼ばれることもある。また、マルーンの一集団名称であるジュカ *Ndjuka* がマルーン全体を指す名称として用いられることもある。

垂れている」などの否定的な身体的特徴を上げる非マルーンもいる。

こうした状況から、クレオールが「混血」と見なされるようになってきたと思われる。たとえば Encyclopedia of the Third World では、クレオールを「混血」の、マルーンを「純血」のアフリカ出自の人々と、それぞれ位置づけている (Kurian 1979)。

スリナム共和国の公用語であるオランダ語とともに当社会の共通語であるタキタキ語は、こうしたクレオールと呼ばれる人々を象徴しているかのようである。その基盤には、西アフリカの沿海地におけるポルトガルの奴隷貿易施設とその周辺で発達したピジン言語があり (Carew 1982)、それがさらに植民地スリナムにおいてプランテーション所有者の使用言語の影響を受けて発達してきた。タキタキ語の別名が「ニグロ英語 *(Nengre Engels)*」であることが示すように、それが「クレオールの文化」として語られることは多く、1855 年にはすでにタキタキ語の辞書 *Neger-Engelsch Woordenboek*（『ニグロ英語辞書』）が発行されている (Hoefte 1996)[6]。けれども共通語であることがすでに示すように、タキタキ語はクレオール以外の人によっても母語のように用いられているのであり、その話者とクレオールが一致するわけではない。

このように、クレオールはさまざまな点で曖昧な範疇である。スリナム社会でこの状況は広く意識されており、「クレオールは同質的ではない」、あるいは「クレオールのほとんどは混血である」と語る人は、非クレオールだけでなくクレオール自身にも多い。たしかに、クレオールとされる人々の祖先にクレオール以外の民族が含まれていることは珍しくないが、先の世帯調査の分類が示すように、スリナム社会におけるクレオールは「混血」と明確に区別されており、「多民族社会スリナム」を構成する一民族なのである。その一方で、「混血」がその他の諸範疇と同じレベルで民族と見なされることはない。言い替えれば「混血」は民族と考えられていないのである。こうした「混血」を指す名称は世帯調査の範疇名に用いられた Gemengd 以外にも、ドグラ *dogla*、モクシ *moksi*、ブラカ・スネイシ *blaka sneisi* など複数あり、その中には、人により異なる意味を付与される名称や、同様の指示対象を持つ複数の名称がある。ただし、それらを「混血」という名称で括ることは可能であり、ここでは「混血」を「複数の民族を祖先集合に持つ人々」と一般化して、クレオールと「混血」の関係性を整理しよう[7]。

ある男性は自らをクレオールとみなし、彼の友人も彼をクレオールとして筆者に紹介している。彼との会話の中で、彼の祖母がアメリカ先住民とクレオールとの「混血」であることが分かった。そこで、筆者が彼自身も「混血」であることを指摘すると、彼は少し考えた後に、生まれたときからクレオールと言われて育ったから自分はクレオールである、そして、クレオールであると同時に「混血」であることは可能であると語った。また、彼の妻は肌の色が白く、直毛であるが、自分をクレオールと考えている、さらに、ある人が「混血」であるか、あるいはいずれかの民族であるかはその人のアイデンティティの問題である、とつけ加えた。

[6] タキタキ語のもう一つの別名に「スラナン語 (Surinaams, *Sranan Tongo*)」がある。クレオールのものとスリナムのものとを暗黙のうちに同一視する思考がこの名称に表われているように、「スリナム・ナショナリズム」と「クレオール・ナショナリズム」を判別することは難しい。タキタキ語は今日でも「スリナム・ナショナリズム」の象徴であり続けている。

[7] この一般化は、「混血」への同定に用いられる三つの基準に目を向けることで可能になる。第一のそれは身体的特徴という指標であり、「波状の髪」が上げられることが多い。これは縮毛を持つアフリカ系住民と直毛を持つ非アフリカ系住民との間に生まれた人が「混血」とみなされることを示唆している。第二が、複数の民族が含まれる系譜である。さらに、苗字と皮膚の色や顔だちが、いわば本来的に一致しない場合も「混血」とみなされうる。たとえば、中国系の苗字とアフリカ系の外見を持つ人はブラカ・スネイシ、インド系の苗字とアフリカ系の外見を持つ人はドグラと呼ばれる。このように、民族への帰属を示す指標間のズレが第三の基準である。いずれの場合も、出自に含まれる民族が複数であることが問題になっている。しかし、そういう人々が自動的に「混血」とみなされるわけではない。当人がその祖先集合を隠すことができれば、その人は「混血」とはみなされない。

もう一人のクレオールはユダヤ人の父とクレオールの母を持つ女性である。「混血」とは複数の民族の間に生まれた人であると彼女が意味づけたので、これに対し筆者が、彼女が「混血」であることの是非を問うと、彼女はそれをまるで汚点と考えているかのように認めた。彼女が「混血」であることは、彼女の家族構成を知る友人からも認められている。また他に、彼女が「混血」であることを示す指標として彼女の比較的白い肌と小幅の鼻を上げる人もいる。けれども、彼女が「混血」であり、クレオールではない、と考えられているのではない。クレオールとしての彼女の自己同定は友人からも受け入れられているのであり、インド系住民の「人種主義」に「われわれクレオール」は迷惑していると、彼女が夫と二人で筆者に訴えることもあった。

かれらのこのような同定に表われている論理を次のように単純化することができよう。まず、ある人の祖先集合の中にクレオールと非クレオールが含まれている。その人はそのうちの一つ、クレオールを選択して、自らの出自をクレオールからのものと語る。言い替えれば、クレオールからの出自を選択することによって、二つの民族から構成される自らの祖先集合全体があたかもクレオールのみから構成されるかのように語る。ただしこれとは逆に、「混血」に同定される基準が当人に認められて、その祖先集合がいわば異質的であることが判れば、その人は「混血」と見なされうる。実は、こうした論理関係は、クレオールと「混血」の間にのみ見い出されるとは限らない。たとえば、ある男性は自らを中国系住民に同定し、友人たちからもそれを認められているが、その一方で、系譜から判断すれば彼は「混血」であると筆者が指摘すると、彼はそれを認めたのである。

したがって民族と「混血」を比較した場合、それぞれを次のように一般化することができよう。すなわち、民族とは、祖先集合が同質的に語られる範疇である。クレオールはこうした民族のうちの一つであり、クレオールと呼ばれる人々はそれに同定が可能な人々である。その一方で「混血」は、祖先集合が異質的に語られる範疇である。このように考えれば、世帯調査の分類とは異なって「混血」が民族として数えられることがなく、かつ「混血」と民族が重なることを説明づけることができる。

## 2. スリナム史に関わる位置

クレオールと呼ばれる人々が自らの祖先集合を同質的に語ることができるのは、かれらが一つの出自を共有しているからである。それでは、その出自が由来する場所はどこにあるのであろうか。

スリナム社会の民族の起源がその「出身地」により説明されることは多い。すなわちこれは、ある単位が出身地を持てばそれは民族と見なされるのであり、そこでは民族を成立させる原理が「出身地」であるということである。この場合、クレオールとマルーンは、アフリカ大陸西海岸という同じ地域からスリナムに来たために、「アフリカ系住民」として一括されたり、または、マルーンがクレオールの下位範疇に位置づけられたりする。しかし、その原理からすれば、両者が弁別されて他の民族と並列される分類は、いわゆるクラスの混同をおかしていることになってしまうのであり、両者は別の原理によって分類されていると考えた方がよい。

ここで思い出されるのが、「プランテーション奴隷の子孫」というクレオールの定義である。プランテーション経済の発達とアフリカからの奴隷の輸入によって生じた「ヨーロッパとアフリカ文化の混交」が「プランテーション－クレオール文化」を生んだとするように (Agerkop 1995:12)、今日「クレオールの文化」と考えられるものはプランテーションでの生活と結びつけられている。たとえば、タキタキ語がスリナム社会の共通語であり、したがってクレオール以外にもその話者がいるにもかかわらず、その「文化」でありえているのは、アフリカ人奴隷から広まり、プランテーションで発展してきたとい

う歴史的背景に因っている。また、同じように「クレオールの文化」とされるウィンティ *Winti* 信仰[8]にも、それが奴隷の精神的安寧のみならず植民地支配者からの「解放の形態」(Stephen 1998:21-22) をも伴っていたと説明されるように、クレオールとプランテーションの結び付きが見い出される。

クレオールの社会文化協会ウィ・ナ・ウィ *Wie na Wie* は 1992 年 7 月 1 日に、同日の奴隷解放日を祝うケティ・コト *keti-kot* という行事を催している。その際に、クレオール女性はアニサ *anjisa* とコト・ミシ *koto-misi* という「クレオール女性の伝統的衣装」(Caprino 1995:62, 65) を身につけている[9]。現存する歴史資料から判断して、コト・ミシが今日知られる形に変化したのは、早くとも奴隷制廃止以降から 20 世紀初頭までの間と推定されるが (Stichting Surinaams Museum 1982:24)、一般的にはコト・ミシとアニサは「奴隷の衣服」であり、「仕事中の会話を禁止された奴隷はそれを使って意思の疎通を行なった」と捉えられている (Bodegraven 1995:96-97)[10]。

こうした「プランテーション奴隷」としてのクレオールの位置づけは、前述の「出身地」という原理による民族の分類と同じように、スリナムの歴史とともに語られるのが普通である。すなわち、「スリナムにはまずアメリカ先住民がいた。そこにオランダ人が植民地を作った。そしてアフリカ人を奴隷としてスリナムに連れて来た。その中にはプランテーションでの厳しい生活を逃れてジャングルで部族を作る者がいた。その子孫がマルーンである。一方でプランテーションに残った奴隷は 1863 年に解放された。その子孫がクレオールである。その後中国人が来た。次にインド人とジャワ人が来た。」

このような語りはスリナム社会で決して珍しいものではなく、筆者が 1998 年夏にスリナムで入手した観光パンフレットでも同じような民族の説明がなされている。

> スリナムの人口 43 万人はさまざまなエスニック集団から構成されている。最初の住人であるアメリカ先住民は約 9 千年前に初めてわれわれの国に来た。ヨーロッパ人植民者は 17 世紀に来て、アフリカからニグロ奴隷を連れて来た。1863 年の奴隷制廃止後、インド・中国・インドネシアから契約労働者がもたらされた。スリナムには小さなユダヤ人ならびにレバノン人の共同体もある。内陸部にはプランテーションから逃亡した奴隷の子孫マルーンもいる。(Stichting Toerisme Suriname 発行年不詳)

パンフレットに見るこうした民族の語りを論理的に徹底したものが、アメリカ先住民、マルーン、クレオール、インド系住民、ジャワ系住民という順にスリナムの民族を紹介する観光ガイドブックであろう (Bodegraven 1995; Tjin 1995)。つまり、クレオールとマルーンという範疇は、いわばスリナム史への出現の仕方、あるいはそれへの関与という原理によって分類されている。言い替えれば、クレオールという範疇は、プランテーションでの奴隷時代という特定の位置をスリナム史の中で有することによって成立しているのである。

さらに、「プランテーション奴隷の子孫」としてのクレオールが、「逃亡奴隷の子孫」であるマルーンと対照的な関係を持つことに注意されたい。後者の生活領域が植民地政府の統治が及

---

[8] これは、ウィンティと呼ばれる精霊による人間への憑依によって日常のさまざまな問題の解決法を示す呪術的信仰体系である。この信仰には決まった名前がないが、ここではウィンティ信仰と呼んでおく。キリスト教徒でありつつ、この信仰を実践する人々はクレオール以外にも多いようである。

[9] ウィ・ナ・ウィ、ケティ・コト、アニサ、およびコト・ミシは全てタキタキ語である。ウィ・ナ・ウィは「我等の家の我等」を、ケティ・コトは「クサリの破壊」を意味する。アニサは多くの場合三角に折られた頭巾であり、コト・ミシはコト（堅く糊づけされた長いスカート）、コトベレ *koto-bere*（ひだの付いた腹巻）、およびヤキ *jaki*（堅く糊づけされた上着）からなるコスチュームである。

[10] コト・ミシとアニサはリボンの結び方やショールの羽織り方、あるいは色や模様によって、「私には恋人がいるが、彼は外出している」、「そこの曲がり角で待って」、「ついて来て」などのメッセージの伝達に用いられた (Stichting Surinaams Museum 1982)。これらの衣装を用いる舞踊コト・ダンシ *koto dansi* は、今日では中・上流階級のクレオールにより行なわれている (Caprino 1995:66)。

ばないジャングルであるのに対し、前者のそれは政府の統治下、すなわち「西洋的」なところなのであり、またスリナムでは事実上、そこは大西洋沿岸地域の都市部に該当する。西洋的あるいは都市的生活様式が認められればその人はクレオールと見なされ、一方そうでない場合はマルーンと見なされるというように、両者の違いが生活様式に求められることがある (Brana-Shute 1979:XIII-XV)。けれども、都市部やオランダで自らをマルーンと同定する人は存在するし、ジャングルに住むアフリカ系住民が自らをクレオールと同定する場合が考えられるように、生活様式の違いは両範疇を弁別する原理ではない。たしかにクレオールと呼ばれる人々に「西洋的で都市的な人々」は多いのであるが、それはクレオールに同定される際の一つの判断基準にすぎないのである。

## おわりに

スリナム社会のクレオールは、マルーンとは対照的に、「プランテーションでの奴隷生活」という位置をスリナム史の中に占めることで成立している。クレオールと呼ばれる人々はその位置からの出自を共有する人々である。そこでの生活を反映し、かれらには「混血」の人々や西洋的な生活を営む人々が多く含まれている。また、クレオールがすなわち「混血」を意味するのではない。むしろクレオールとは「混血」を生む一つの単位であり、こういってよければ「純血」でもある範疇である。実際に筆者は、自らを「純血のクレオール volbloed Creool」と誇る青年に出会ったことがある。それを思い出すと、たとえ意味内容が異なるとしても、昨今の議論に見られるようなクレオール概念をスリナム社会でいたずらに美化することが、容易にスリナムのクレオール・ナショナリズムを讃えることに繋がっていく危険性を指摘せずにはいられない。

本論の冒頭に上げたような批判は、より抑圧性のない世界を実現するために継続されねばならないだろう。けれども、たとえばカリブ海の地域社会で日常的に使われるクレオールとは何を意味しているのか、という問題に取り組む方向も見過ごされてはならない。言い替えれば、昨今のクレオールをめぐる議論に欠けているのは、個別社会におけるクレオールへの考察ではないかと思われる。

## 謝辞

本論は、1999 年 1 月に立教大学文学研究科に提出した修士論文「混血と民族の一考察—スリナム社会の事例から—」の一部を拡大し、加筆・修正したものである。修士論文ならびに本稿執筆にあたって同学豊田由貴夫先生には貴重なコメントを頂いた。記して感謝したい。

## 参考文献

Agerkop, T. 1995. Sranan, Cultuur in Suriname. In *Sranan:Cultuur in Suriname.* Ch. van Binnendijk and P. Faber, eds. Pp.10-15. Paramaribo: Vaco n.v, Uitgeversmaatschappij.

Afdeling Huishoudonderzoeken. 1998. *Huishoudens in Suriname.* Paramaribo: Algemeen Bureau voor de Statistiek.

Bodegraven, J. v. 1995. *Dominicus Reeks; Suriname.* Haarlem: J.H. Gottmer.

Brana-Shute, G. 1979. *On the Corner: Male Social Life in a Paramaribo Creole Neighbourhood.* Assen: Van Gorcum.

Caprino, M. H. 1995. Contacten tussen Stad en District. In *Sranan: Cultuur in Suriname.* Ch. van Binnendijk and P. Faber, eds. Pp.10-15. Paramaribo: Vaco n.v, Uitgeversmaatschappij.

Carew, J.G. 1982. Language and Survival: Will Sranan Tongo, Suriname's Lingua Franca, Become the Official Language? *Caribbean Quartely* 28(4 Dec.):1-16.

Hoefte, R. 1996. Free blacks and Coloureds

in Plantation Suriname. *Slavery and Abolition*. Pp.102-129.

Kurian, G. T. 1979. *Encyclopedia of the Third World*, Fourth Edition (Panama to Zimbabwe); Vol. 3. London: Mancell.

Lier, R. A. J. v. 1971. *Frontier Society: a Social Analysis of the History of Surinam.* The Hague: Martinus Nijhoff Pub.

Schoffelmeer, J. 1982. Iets over de Oorspronkelijke Godsdienst der Creolen in Suriname. *Stichting Surinaams Museum Mededelingen* No. 38.

Stephen, H. J. M. 1998. *Winti Culture, Misteries, Voodoo and Realities of an Afro-Caribbean Religion in Suriname and the Netherlands.* Amsterdam: Under one's own management.

Stichting Surinaams Museum. 1982. De Kotomisi en haar Anjisa. *Stichting Surinaams Museum Mededelingen* No.32, March.

Stichting Toerisme Suriname. 発行年不詳. *Suriname; Beating Heart of Amazone.* Paramaribo: Stichting Toerisme Suriname.

Tijn, R. 1995. *Reizen in Suriname: Piranha en Mope.* Den Haag: CIP Gegevens Koninklijke Bibliotheek.